第１号様式　　主要事業の進行状況報告書　　平成 31 年３月 31 日

93	港湾局	東京港の港湾計画に基づく港湾施設の整備
事業概要	東京港は、世界の基幹航路の船舶が直接寄港する世界でも屈指のコンテナふ頭を備えた国際貿易港であり、都民を始めとする首都圏 4,000 万人の生活と経済活動に必要な物資を、国内外から迅速にかつ安定的に供給する一大物流拠点として、重要な役割を果たしている。 一方、東京港は物流機能だけでなく、東京にとって貴重な空間である埋立地を利用して、東京の都市構造の再編や都民の活力とうるおいのある生活に寄与するために、産業基盤としての機能、生活基盤としての機能及びレクリエーションの場としての機能などを果たしている。 国際貿易及び国内海上輸送の中枢的な港湾として、東京港の物流機能強化を図るため、港湾施設の整備は、平成 30 年代後半を目標とした東京港第８次改訂港湾計画に基づき着実に推進していく。	
これまでの経過	・ 大正 14 年に日の出桟橋、昭和７年に芝浦岸壁、同９年に竹芝桟橋完成 ・ 昭和 16 年に東京港開港 ・ 昭和 31 年に「東京港港湾計画」策定 ・ 昭和 42 年に品川ふ頭に外貿コンテナふ頭を整備 ・ 昭和 46 年から 50 年にかけて大井コンテナふ頭を整備 ・ 昭和 49 年から 52 年にかけて 10 号地その２フェリーふ頭を整備 ・ 昭和 60 年に青海コンテナふ頭の一部が完成 ・ 平成５年にレインボーブリッジが完成 ・ 平成 14 年に東京臨海トンネルが完成 ・ 平成 24 年に東京ゲートブリッジを含む東京港臨海道路が完成 ・ 平成 26 年「第８次改訂港湾計画」を策定	
現在の進行状況	○第８次改訂港湾計画の策定 ［新規計画］ ・大井コンテナふ頭 既存ふ頭（大井水産物ふ頭）の用途変更を行い、コンテナふ頭（１バース）を計画 ・15 号地コンテナふ頭 係船利用の低下している木材関連施設を再編し、コンテナふ頭（２バース）を計画 ・品川ふ頭 船舶の大型化に対応するため、増深（水深 10m⇒11m）を計画 ［既定計画（整備中含む）］ ・中央防波堤外側及び新海面処分場コンテナふ頭（４バース） ・新客船ふ頭（１バース） ・臨港道路南北線（４車線） ○ ふ頭機能の整備 新客船ふ頭、中央防波堤外側コンテナふ頭、品川内貿ふ頭、10 号地その２フェリーふ頭 ○ 道路ネットワークの整備 臨港道路南北線及び接続道路	

現在の進行状況	○ 防災機能の強化 ・海岸保全施設の耐震化等 防潮堤（京浜運河、芝浦運河）、内部護岸（曙運河、朝潮運河、新芝運河）、水門（新砂、佃）、排水機場（辰巳） ○ 新海面処分場の整備 ・護岸建設 Ｄブロック護岸 ・延命化対策 Ｄブロック深掘
今後の見通し	・ 東京港は国際貿易港として、また、国内拠点港として、首都圏の生活と産業を支える大きな役割を担っている。また同時に、東京港の海域や埋立地は、臨海副都心における交流拠点の形成、人々に憩いをもたらす海上公園や都市の骨格を成す交通インフラの整備など、東京のまちづくりを支える場としても多様な役割を果たしている。 ・ しかし、国際的な産業・貿易構造の変化、我が国における急速な高齢化の進展、環境問題の深刻化など東京港を取り巻く社会情勢は大きく変化しており、物流サービスの向上や人々の交流の活性化、環境との共生、安全の確保など、新たな要請に応えていくことが強く求められている。 ・ 目標年次を平成 30 年代後半とする「東京港第８次改訂港湾計画」に基づき、港湾機能と都市機能とが有機的に結合した「世界に誇る都市型総合港湾・東京港」の創造を目指し、東京港の機能を強化していく。

問い合わせ先	港湾局　港湾整備部　建設調整課 港湾局　港湾整備部　計画課	電話	03-5320-5604 03-5320-5612